

琵琶湖の主要な両生類・爬虫類は、いまや外来種です。在来種が見られるのは、一部の遠浅の地域や、水際にヨシ帯の続く部分だけです。しかも、これらの種の湖周辺の水田地帯や湿地との交流もコンクリート護岸や、道路の存在に制限されがちです。

1. 湖と両生類・爬虫類

大きな湖に生息する両生類・爬虫類の種数は多くありません。両生類は卵・幼生（オタマジャクシ）の段階を水中で過ごすため、湖との関連が深いかのように思われるかも知れません。

しかし、両生類が実際に利用できる水環境は限られていて、何でも良いわけではなく、多くの種は繁殖の際に浅い水場を選びます。

卵はふつう水底に産まれますから、水深がありすぎると酸欠や低温でうまく発生できないのです。従って、大きな湖を直接の生息場所にできる種は、極めてわずかにすぎません。

一方、爬虫類のカメ類も水との関連が深いのですが、これも陸上で産卵するため、コンクリート護岸や道路の存在によってその分布域は制限されます。

2. 琵琶湖とその付近に見られる両生類・爬虫類

両生類が直接利用できるのは、自然環境の残った河口付近の湿地、遠浅で波の弱い部分、水際にヨシ帯が広く続く部分などです。

湖北の一部では遠浅の環境にヤマトサンショウウオやナゴヤダルマガエルが見られ、湖西のヨシ原ではニホンアカガエルが繁殖していますが、そうした場所は急速に減りつつあります。



写真7-18-1 滋賀県の希少種ヤマトサンショウウオ

ヨシ原には移動性の高いニホンアカガエル、トノサマガエル、カナヘビがしばしば見られます。また、そこに営巣するオオヨシキリを主食とするのか、異常に巨大化したシマヘ



びも棲みついています。

しかし、いま琵琶湖を主要な生息場所としているのは、外来種です。ウシガエルは他のカエルと違って水底ではなく水面に卵を浮かべるため、水深を問題としません。また幼生の遊泳力も強いので、湖の内部も利用できます。しばしば騒音公害ともなるこのカエルは、かつて滋賀県水産試験場がさかんに養殖し、外貨を稼いだものの末裔なのです。

ミシシippアカミミガメは幼時にミドリガメと呼ばれ、ペットとして人気があります。しかし、成長後に飼育を持て余した人々にとって、湖は恰好の投棄場所となってしまう、完全に定着して在来種のニホンイシガメやクサガメ*を駆逐しています。

なお琵琶湖ではしばしばオオサンショウウオが見つかりますが、近年、純粋な日本産ではなく、中国産との雑種が見つかって問題となっています。

*クサガメは明治より昔の外来種という説がある。



写真7-18-2 滋賀県の絶滅危機増大種
ナゴヤダルマガエル



写真7-18-3 激減しているニホンアカガエル



写真7-18-4 外来種に圧迫されているニホンイシガメ